

創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

VI／失われた世界

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976年版 —

第2部 創造主の造られた世界

VI 失われた世界（創世記四～五章）

義人アベルの血

偉大なる原始福音で、神はヘビのすえと女のすえとの間の来たるべき闘争について語られました。アダムとエバはまもなく、二人の息子の悲劇で、この闘争が現実であることを知らされるのでした。

カインとアベルの物語はあらゆる面で、実際の歴史として理解されるべきであり、また、二つのすえの長い闘争のたとえでもあります。カインは「ヘビのすえ」の型であり、一方アベルは「女のすえ」キリストのひな型です。二義的には、アベルは信仰によってキリストにある人であり、それゆえに霊的な意味で「女のすえ」である人々を代表しています。

エデンの園から追放された後に、神が人と交わりを続けるために、慈悲深い準備をされたことは十分考えられることです。たとえ「今は遠く離れている」とはいえ、血を流して贖いの代価を払われるはずの来るべき贖い主の約束に基づいての準備です。神はアダムとエバに「罪をおおう」ために、すなわち「贖い」のた

めには罪なき者の血が流される必要があることを示されました。おそらく定められた時と場所で、人は神に会うことができたはずですが、それにはまず第一に、適当なささげものをたずさえて行くという手段で注意深く神に近づくことができませんでした。その特色は罪のないものを罪の代わりに割り当てるといふ身代わりの原則です。この方法で「礼拝する」、文字通りに言うると、神のみこころに頭をさげる人々は自分自身の罪過と望みなさを認めた人々であり、同時に、完全な救いと準備は神により頼む以外にないことを認めたのです。この過程は三章六節でサタンがエバに訴えたのとは対照的で、食べるによく、目に慕わしく、また、賢くするといふような人の欲望に訴えるものは何もありませんでした。それゆえ、人間の誇りが、神の意思に完全に服従する必要があつたことでしょう。

四章一〜二節　人は、その妻エバを知つた。彼女はみこもつてカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」と言つた。彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カイン土を耕す者となつた。

神に近づき、神を知ることに対する心の態度が實際上人の永遠の運命を決定します。もし人が喜んで神のこぼを受け入れ、神の小羊である贖い主の流された血潮を通して神が用意されたことを信ずる信仰だけに基づいて神に近づくなら、その人は、靈的に天に生まれた「女のすえ」で、神の臨在と交わりを回復します。しかし、もし人が神のこぼをゆがめ、拒否し続け、自分自身の功德によつて救いを得ようとするなら、結局、神の分野に自分の意志を差しはさんでいることになり、人は「神のようになり、善悪を知るようになる」

と思ひ、結局ヘビのすえとなるのです。

この全く異なった人間の二つの要素は、アダムの初めの二人の息子のうちに完全に例証されています。最初の子が生まれた時、エバは、「私は、主によってひとりの男子を得た」と歡喜の声をあげました。この贊美のあかし自体、エバが主を信じ、神の約束は事実にあつていと信じていた証拠として十分です。その時、もちろん産みの苦しみは経験しましたが、神が息子を与えてくれたということによつて、神は忠実な方であることも分かつたのです。

「アダムはその妻を知つた。」これは夫婦間の性交のために、聖書でよく用いられる婉曲な表現の最初のものです。このような表現はまたとなく男と妻の、二人が一体であることの完全な調和と理解、さらに性愛と繁殖の能力を通しての神の原初の目的が理想的であつたことを知り得ることに力点があります。

カインという名の意味は「得た」であり、まさにエバの子を得た歡喜の叫びから名づけられたものです。ある特別な出来事に関連づけて子どもに名前をつけるという例は、旧約聖書の他の箇所と同様に創世記(四・二五、五・二九、一七・五、四一・五一、など)にしばしば見いだされます。この現象がモーセの五書の主な三つの文書資料(C・F・D)の中に見いだされるのは、意味あることです。これらすべてのいわゆる文書資料が實際上、矛盾しない統一された文書資料を構成しているという事実自体が、真の出来事を伝えている強力な証拠です。

エバは、子どものことで感謝しただけでなく、男を産むことができたことを感謝しました。このことは、その赤ん坊がやがて成長して成年男子となるはず、という信仰の表現のように思われます。たとえその子に「女のすえ」であるという特定の生物学的意味がなかつたとしても、エバ自身、これが約束の救い主かも知れ

ないと考えた可能性があります。事実、その子は「悪い者から出た者」（イヨハ三・一二）であり、こういうわけで、長い一連のへびのすえの最初のものでした。

しかし、カインの弟アベルは、本当に信仰の家族の中の一人でした。ヘブル人への手紙第一章に記されている、信仰の人々の長い系列の中で最初に（四節）述べられています。彼は「義人」であり、預言者と呼ばれました（マタ二三・三三、ルカ二・五〇、五一）。

ほかでもない主イエス・キリストからのこのような推薦状は、アベルがただ神のことばを信じて従った人であり義人であったために殺されたことを意味しています。預言者としてアベルは、神の啓示による主のことばを受け入れ、神から与えられた能力をもってそれを宣べ伝えたに違いありません。しかし、カインはそのみことばを拒否して従いませんでした。

アベルはエバの二番目の息子であり、カインの誕生後しばらくして生まれました。何人かの聖書の注解者たちは、アベルを妊娠したという記録が別がないので、アベルもまたカインと同時にみごもったことを意味していると考えています。しかし、これはどうもそうではないようです。なぜなら、もし同時にみごもったのならそう言われているはずだからです。

アベルという名は「蒸気」または「虚無」を意味しており、アベルの誕生の時には、この世界への神ののろいの衝撃がエバに徹底的に印象づけられていました。神は確かに創造を「虚無に服させ」ました（ロマ八・二〇）。

二人は成長し、カインは土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となりました。二人ともまじめに仕事に就き、家族のためにカインは農作物を食糧として供給し、アベルは羊を衣服として供給しました。なおその

上に、たぶん、羊は犠牲のために用いられるはずだったことでしょう。神がアダムとエバに教えた教訓は忘れてはならないものでした。贖い（罪を「おおい隠す」）には血が流される必要があります。

人はノアの洪水後までは動物を食糧とする権限は与えられていませんでした（創一・二九、二・一六、三・一九、九・三）。人口が増えるにつれ、アベルの羊は確かに、犠牲または衣服に用いるためにだれでも商売したり買うことが出来るようになったことでしょう。

四章三〜五節 ある時期になって、カインは、地の作物から主へのささげ物を持って来た。また、アベルは彼の羊の初子の中から、それも最良のものを、それも自分自身で、持って来た。主は、アベルとそのささげ物とに目を留められた。だが、カインとそのささげ物には目を留められなかった。それで、カインはひどく怒り、顔を伏せた。

人が神と交わりを持つことのできる時間と場所があったように思われます。その場所は、おそらくいのちの木への道を守るためにケルビムを置かれたエデンの園の入口だったことでしょう（創三・二四）。アダムとエバは園から追放され神の面前から追い出されました。しかし、神の恵みにより、また約束の救い主のゆえに、ある条件で人は神に近づくことが許されました。そこで、人はみことばを聞き、主の導きを受けることが許されました。

アダムとエバは二人の息子を同じように愛し、同じように教育したと思われます。ですから、カインとアベルがなぜそれぞれ異なった性格や生活態度をもつにいたったかを理解することは容易ではありません。し

かし、このような内面的性格の違いは次第に現われてきました。アダムとエバは他にも息子や娘たちを生ましました（創五・四）。それゆえ、カインとアベルはこの章に描かれている出来事が起こる何年も前にすでに弟や妹たちがいたと思われる。彼らは二人とも成人であったし、両親は生めよふえよという神からのことばを受けていたので、このことはその命令に従う以外の何ものでもないように思われます。

したがって、この節に出て来るこれらの神へのささげ物は、二人の息子たちがささげた最初のものではないことが分かります。むしろ、これは特定の期間、恐らく安息日の定期的な行事になっていたに違いありません。このことはヘブル語では、文字通りに「日々の終わりに」であり、そのことを暗示しているようです。これはカインがはじめて非難された出来事であり、それまではカインのささげ物は神が受け入れることのできるものであったと推論されます。

このようなささげ物が、実際に神から命じられていたのか、または単なる感謝と礼拝の自発的表現であったのか、聖書は、特に述べていません。しかし、もし自発的な感謝と礼拝の表われであったとすれば、なぜ、神はカインの収穫物のささげ物を、アベルのほふられた小羊ほどに喜ばれなかったのか理解に苦しみます。やはり、神が指示を与え、カインがこの指示に従わなかったと理解するほうがよいようです。この事件の全貌は神に近づくための必要条件として、身代りの犠牲が必要であったことに関して、神が初めに啓示しておられた啓示との関係でのみ真の理解に達し得るのです。

このような啓示は、神がアダムとエバに皮の衣を準備して下さった時に啓示されたと考えるのが最も妥当で、二人は神の面前から追放されましたが、その後も同様の犠牲をささげるといふ条件で特定の時に、特別の手段で、なお神との交わりを続けることができました。

アダムとエバは当然のこととして、疑いもなく、この規定に従って子どもたちを教育していました。子どもたちは長い間その教えに耳を傾け、また従いました。カインはその都度、自分自身のささげ物のためにアベルから羊を買って、定められた所にやって来ました。

しかし時がたつてカインは、ついにこの立場を恨みに思い始め、それにそむく決心をするに至りました。その都度自分の弟に恩を受けなければならぬふさわしい理由などないように思われました。カインが実らせたものはどれをみても、アベルの動物たちと同じように価値あるもので、少なくとも人間にとって魅力的で有用なものでした。

それゆえ、カインは、ずうずうしくも反抗し、ついに弟の羊を一匹でももらい受けるに耐えられなくなつたことでしょう。その代わりに、神がのろわれた土地から自分で労苦して得たものを持つてきました。神のみこころを気につけない冷淡さで、これらの実をささげたことでしょう。あるいは、神が呪われた地にもかかわらず、産することのできたものに対する誇りさえもつて、または、神の前での裸は、血を流すことによつてのみ提供されるおおいを必要としたというこゝに對する反抗心をもつて、彼は地の産物をささげました。とにかく彼の心は、神の前に正しくありませんでしたし、彼のささげ物は弟のものとは異なり信仰によるものではありませんでした。それゆえ、神は、カインのささげものを拒まれました。

「信仰によつて、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、そのいけにえによつて彼が義人であることの証明を得ました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だとあかししてくださつたからです。彼は死にしましたが、その信仰によつて、今もなお語っています」（ヘブ一・四）。さらにアベルは、「彼の羊の初子の中から、それも最良のもの（英欽定訳では「脂肪の部分」）をささげました。このことは後に「脂肪は全部、

主のものである」(レビ三・一六)とあるように、実際にモーセ律法の「和解のいけにえ」と一致しています。カインは見かけは高慢でしたが、今は「顔を伏せ、激しく怒り」ました。多分彼の人生のこの時点まで、彼は、外面的には敬虔で、神に従順なように思われたかも知れませんが、この事件は結果的に、その時まで悩んでいたにちがいない内面的な高慢さといきどおりを暴露しました。このいきどおりは神だけにではなく弟アベルにも向けられました。カインが神の前に出るためにはアベルの羊を手にいれなければならなかった事からわかるように、カインの働きは神の前に出るには適当ではなかったという事実の外的象徴がアベルだったのです。その上、アベルは預言者でしたから、多分、兄のこのような弱さを見抜いて、兄に注意を促していたことでしょう。このような立場は結果的には、カインのように自尊心の強い人には我慢できないことだったのです。

四章六〜八節そこで、主は、カインに仰せられた。「なぜ、あなたは憤っているのか。なぜ、顔を伏せているのか。あなたが正しく行なったのであれば、受け入れられる。ただし、あなたが正しく行なっていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。だが、あなたは、それを治めるべきである。」しかし、カインは弟アベルに話しかけた。「野に行こうではないか。」そして、ふたりが野にいたとき、カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した。

カインの憤りにもかかわらず、神はカインが「正しく行なう」ならば、まだ神に受け入れられることを約束しました。それは疑わずに「神のことばに従う」ということです。聖書の中で初めて罪ということばがこ

こで用いられています。しかし、もし、カインが反抗し続けるなら、罪は「戸口で待ち伏せして」います。彼はここで本当の意味でへびのすえになつたのでした。罪を彼の従順なしもべ（創三・一六b、四・七にある同じ用語と比較せよ）として用いて、啓示された神の御心に逆らうようになりました。しかし、カインは神の警告を拒み、自分のやり方を続けていくことに決めました。神の最初の「預言者」（ルカ一・四九〜五一参照）としてアベルは、カインの選択に対してしきりに忠告したことは確かです。それは「カインは弟アベルに話しかけた」とあるからです。しかし、高ぶり、ねたみ、そしてうらみという種からは苦い実がなります。カインのささげ物が神に受け入れられなかつた時に、この年を経たへびの憎悪は、カインの心を完全に毒してしまいました。そしてカインの心は、アベルの血が流されるまで休みを得なかつたことでしょう。二人は野に出て話しましたが、その時、カインは神の狭量な偏愛と弟の独善的なでしゃばりを責め、アベルはカインに悔い改めを促しました。その二人の討論は最終的に苦々しいものとなり、「カインは弟アベルに襲いかかり、彼を殺した」のです。「なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行ないは悪く、兄弟の行ないは正しかったからです」（Iヨハ三・一二）とあります。いま、この殺人は前から考えられていたものであつたとする意見さえもあります。

しかし、それはマソラのテクストには含まれていませんが、他のいくつかの古代訳文（サマリヤ五書、七十人訳聖書など）には次のように示されています。アベルがカインと話していた時、カインは野に出ていて話を続けようと誘いだし、それが結局は、他人に制止されることなくアベルを殺害する機会をつかむことができたのです。いずれにしても、はつきりしていることは、禁断の木の実を食べてしまったというささいな罪は、すぐにより大きな罪となり、より苦々しい実を結ぶ結果になつてしまったことです。それは兄弟殺

しの罪でした。ヘビのすえはすぐに女のすえを打ち砕き、長男を墮落させ、次男を殺しました。そんなわけで、人間歴史の一番最初に、原始福音にある約束の成就を妨げようとしたのでした。

四章九〜一二節　主はカインに、「あなたの弟アベルは、どこにいるのか。」と問われた。カインは答えた。「知りません。私は、自分の弟の番人なのでしょうか。」そこで、仰せられた。「あなたは、いったいなんとうことをしたのか。聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。今や、あなたはその土地にのろわれている。その土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた。それで、あなたがその土地を耕しても、土地はもはや、あなたのためにその力を生じない。あなたは地上をさまよい歩くさすらい人となるのだ。」

この恐ろしい出来事が行なわれるや否や、神はカインに弁明するように声をかけられました。この時カインは、神の指示を求めて犠牲をささげる場所へ行つたものではありません。むしろ、神御自身がカインを捜して野に出てきたのです。神の最初の質問はカインに罪の自白を促すために考慮された教育的なものでありました。主はアベルの居場所について知りたかつたわけではありません。神に対する謙虚さと畏敬の念をもって応ずるかわりに、カインは大胆不敵にもこのような質問を自分にする神の権利を問いただしたのです。「知りません。私は、自分の弟の番人なのでしょうか」と。

ある意味で、カインがアベルの居所を知らないというのは本当に事実でしたが、これはもちろん見えすいたうそでした。信仰に生き、神が契約した主の来臨前に死んでいった人たちがそうであるように、アベルは

黄泉の国の最初の住人でした。そこは地球の中心であり、救い主が来られるのを待っていた人々の霊の住みかでした。アダムが罪を犯し、神がアダムを捜された時、アダムはその罪を認め、悔い改めて神に答えました。しかし、カインはそうしませんでした。彼は神に見えすいたうそをいって、自分の不行跡を示談にしようと思いました。そして、彼に対して、神が質問する権利に対してさえ挑戦したのです。このように長い間抱かれつづけてきた罪は、人の心をかたくなにし、その意識までも誤らせてしまうのです。

したがって神は、カインにあわれみをもつて語ることはせず、ただ判決を下しました。カインはひどくきらついていた彼の弟の預言の声を静めることはできませんでしたが、弟の血の叫びを和らげることができませんでした。「聞け。あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。」聖書中のこの章句で初めて「血」が使われています。もちろんその前にもいくつかの重大な示唆はありました。アベルは女のすえのひな型であり、神の前に正しい人でした。そしてヘビのすえの一代目の手によって乱暴に殺されたのです。それゆえ、土地から叫ぶアベルの血は、邪悪な者の子孫によって、長い間義人の上に加えられたすべての受難のひな型なのです。このことの頂点と成就是サタンとキリストのカルバリでの戦いに見られます。

キリストが「あなたがたの父である悪魔」（ヨハ八・四四、マタ二三・一五）と言われた宗教指導者たちは、「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい」（マタ二七・二五）と言ってイエスを十字架につけるよう大声で叫んだ時、サタンとキリストの戦いは悲劇的な絶頂へと到達したのです。カインがそうであったように、彼らもまた神の言葉に従うより、罪のないものの血を流そうとしてきかなかったのです。

しかし、キリストの血は「アベルの血よりもすぐれたことを語る」（ヘブ一二・二四）のです。動物の血は決して罪を取り去ることはできません。できるとすれば、動物を殺すことでその皮を一時的な覆いとして使

うことぐらいでしょう。けれども「御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます」(Ⅰヨハ一・七)。この二つの霊的な子孫の闘争は、今日も続いており、最終的頂点へと急速に向かっているのです。現在はサタンの勝利の時であるように思われますが、サタンが最後に打ち負かされるのは、ただ私たちだけが待ち望んでいる近づきつつある栄光のキリストの再臨の時なのです。今でさえ、日々サタンとの戦いの中にあつて私たちは霊的勝利を得るとの主の約束があるのです。「平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように」(ロマ一六・二〇)。

神がカインを懲らしめたことは、ヘビの頭を究極的に踏み砕くことのひな型となっています。その時、サタンは永遠に神との接触を断たれ、火の池に投げ込まれます。カインは永遠に「神の前から追い出され」キリストの福音に聞き従わないものはすべて「主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けます」(Ⅱテサ一・九)。

さらに、カインはこれを持って神に近づこうとした作物の実を収穫することはできなくなりました。土地はもう彼のために生産物を生じさせることはなく、彼は地上の「さすらい人」とならなければなりません。土地は「良い行ないによって救いを得ようとする人たちは、彼らの努力によって生じるものは、ただ「いばらとあざみ」でしかないことに最後に気づくのです。本当の意味での「良い行ない」とは、信仰によって神が私たちを通してなされる行ないだけなのです(エペ二・八―一〇)。

今日、神は、収穫の時まで「毒麦と麦」、よい種と悪い種が共に育つにまかせられた(マタ一三・二四―三〇、三六―四三)のと同じように、カインもまた生き続けることが許されました。しかし、それは「義の道

を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令にそむいた」（Ⅱペテニ・二二）人が非難されたように、カインの運命も最終的には定まっています。

カイン個人に関する限り、彼に課せられた呪いは、特に将来彼が悔い改められなくなるものではありませんでした。しかし、放浪しながら、いつもさまよい歩き、貧しい生計の道を手に入れることのできる土地を捜し出そうとして、洪水前の人々の物笑いの種となりました。いろいろな時に彼らの多くは彼と出会ったことでしょうし、そして、罪人、特に殺人者を待っている刑罰は確かであることをいつも彼らに思い起こさせなくてはです。神は人の命は、まさに神に属するものと考え、不正に血を流すものすべてに、真の意味の悔い改めが速やかになされなにかぎり、最後には血を要求されるのです（創九・五、ヨブ一六・一八、詩九・一二、エゼ三・八他）。

四章一三〜一五節 カインは主に申し上げた。「私の咎は、大きすぎて、にないきれません。ああ、あなたはきょう私をこの土地から追い出されたので、私はあなたの御顔から隠れ、地をさまよい歩くさすらい人とならなければなりません。それで、私に出会う者はだれでも、私を殺すでしょう。」主は彼に仰せられた。「それだから、だれでもカインを殺す者は、七倍の復讐を受ける。」そこで主は、彼に出会う者が、だれも彼を殺すことのないように、カインに一つのしるしを下させた。

カインの刑罰が宣告された時、真の悔い改めはありませんでしたが、少なくとも罪に対する悲しみはある程度引き出されたように思われます。實際上、刑罰（ヘブル語—*avon* アボン）は通常、ただ不正と記され

ているだけであり、したがって、カインが不正を行なったことは、少なくとも、彼の不正が極悪であることと、その罰則の当然の関係を認めたことを示しています。したがって、このことは心にいく分かの変化が起こったしるしであったのかも知れません。彼は、もはや主にこれといった質問も反発もしなかったし、彼の罰が不当に重いと示唆することもありませんでした。むしろ、彼はただ自分で担うには重すぎると叫んだだけでした。

もちろん、神が後に九章六節で要求している最も重要な刑罰を負わせることはしないで、神はカインの生命が損なわれないようにしました。このあわれみの真の理由は、おそらく、カインが最終的に悔い改める希望がいくらかあると神がお認めになられたためでしょう。彼の以前のずうずうしさは恐怖の叫びとなりました。特に、彼は、彼のみじめな状態にあつて、アベル殺害に対する報復のみならず、絶えず生命の危機にさらされていると恐れるようになりました。事実、「違反者の道はきびしい!」のです。

そこで、神はカインに一つはあわれみをもって、また一つには罪に対する神の警告をカインの時代の人々に証言しつづけるために、彼を迫害から守り、カインを殺すものは七倍の復讐を受けると神は約束されました。神はカインを守ることが確実であることを彼に確証させるために、ある種の「しるし」を与えました。「しるし」は正確に言えば、印というよりはむしろヘブル語のオス *osef* に当たるもので、ある人が考えているように、カインを人々から引きはなすために肉体につけられた印ではありませんでした。

このしるしが何であったとしても、カインが必要としていた真の平安を彼に与えませんでした。事実、神が言われたように、彼がさまよい歩くさすらい人として絶えず動きまわらなければならなかったのは、おそらく、彼が他の人々に対する恐れを常に持っていたからでしょう。カインに対する神の約束は広く知れ渡っ

ていました（創四・二四）。そして、それが実際に彼を守り、こうして、彼は町を設立するまで生き続け、多くの子孫を持つに至りました。

カインの道

創世記四章の残りの部分には、ノアの大洪水以前における生活の様子が描かれており、十分に好奇心をそられ、じれったささえうかがえます。これは、人類最初の文明について私たちが入手し得る唯一の情報であると言えます。そして後に、大洪水によって全滅し、当時の文明について物語るものは何も残っていません。考古学の発掘物は、ほとんどすべて、洪水後の堆積物に関するものです。そんなわけで地殻の化石を含んだ岩石層の深くに見られる、ほんのわずかな人工加工物とあわせて、世界最初の黄金時代の半ば伝説的な回想以外には、世界の最初における生活のありさまに関する手がかりを今、見いだすことはほとんどできないのです。

こういうわけで、かつて地上に栄えた最初の強大な文明は、現代の学識者の間ではほとんど忘れ去られてしまっています。民族学者はその研究の過程で、沈んだアトランティス大陸の物語とか、神話上のある種の黄金時代の物語に遭遇します。最近では多くの驚くべき加工物が、古代の惑星間宇宙飛行士に関する奇妙な概念を提唱している著述家たちによって明るみに出されています。そうではなく、実際は、これらの加工物は、

初期の人々、そのうちのある人々は、洪水前の人々であったかも知れませんが、その時代の工業技術がどんなにすばらしかったかをこれら発掘された加工品によってうかがい知ることができます。このようなデータは、今なお議論的的になっていきます。しかし、少なくとも古代の人は、現代の進化論者が想像しているように粗野で原始的なイメージからは、かなり縁遠いものであったことを私たちに示しているのです。

この簡単に書かれた聖書の記録のみが、地球初期に関して私たちが完全に信頼できる唯一の記事です。聖書の記録は、洪水以前の世界が、今、私たちの住んでいる世界とは実質的に確かに違っていたことを私たちに示しています。すでに、論じたように、地上の水の大部分は、「大空の上」に巨大な目に見えない水蒸気の広大なおおいの形で蓄えられていました。「それは、地球のすべての表面をおおい、みごとな「温室効果」を作り出していた」のです。こうして、この水蒸気のおおいは一年中を通して、どこでも一様に暖かい気候をもたらし、風や嵐の全くない状態を作り出したのです。地球の表面は、広大な土地が広がり、全世界は青々と繁った植物におおわれ、たくさん動物でうめつくされてきました。

高い気圧によって現在よりさらに適切であった気候（おそらく水蒸気の天蓋の重さによって引き起こされた今よりもはるかに高い気圧の状態）と、放射能を濾過する水の天蓋の効果は、当時の人々だけでなく、おそらく動物をも、現在よりはるかに長生きできるようにしました。このような高気圧と突然変異をもたらす放射線のない環境は、長寿への重大な役割をはたすことが最近の医学上の研究で実証されました。

さらに、人の遺伝子系の初期の純系や血統は、少しずつ蓄積した遺伝子の突然変異と病原性生物がまだ存在しなかったことと相まって長寿を維持するのに役立ちました。病原性生物はそもそも有益なものとして創造された微生物で、呪いの外界への働きかけにより徐々に病原性生物へと発展していきました。

正確な数字の持ち合わせはありませんが、総人口がどんなに速く増加していったかについて、理性的に推論することができません。

創世記五章の記録によると、それぞれ名のある族長は数百年も生き「息子、娘たちを生んだ」のですから、少なくとも各家族は平均六名の子ども、すなわち三名の息子と三名の娘をもっていたと想定することは控え目で筋が通っています。それではさらに次のように仮定してみましよう。これらの子どもたちが成人して結婚し、彼らの両親が八十歳位になるまで子どもを生むとします。そして両親たちはそのようにして五代目まで、あるいは四百年生きてとすれば、地球は、創造から八百年（少なく見積つてもだいたいカインの一生）の間に、人々は少なくとも十二万人になったことが容易に算出できます。事實は、この数字よりも多いと見ることができるでしょう。なぜなら、この当時の人々は仮定されているよりはるかに長生きであったし、また、おそらく仮定以上に多くの子を生んだと思われるからです。

もちろん、この人口増加の過程が始まるためには、少なくともアダムの息子は、アダムの娘と結婚しなければなりません。おそらく、最初の代では結婚はすべて兄弟姉妹間で行なわれました。このような初期には、この子どもたちのだれもその遺伝子系に突然変異をきたしていなかったので、近親結婚によつては何ら遺伝学上の障害をもたらすことはありませんでした。多くの世代を経て、モーセの時代になって、近親結婚が遺伝的に危険な状態になるまで、病的な突然変異が蓄積されてしまったのです。そのため、近親結婚はモーセの律法において禁止されました。

こういふわけで、カインの妻に関する古くさいあらさがしは、全く取るに足りないものです。カインが死ぬずっと前に地球の人口はかなりの数に達していました。アッシュヤーの年代によると、洪水の時まで創造

から一六五六年で、この保守的な仮定事項を用いたとしても、ノアの大洪水時の世界人口は、少なくとも七十億人に達していたはずだ。

人口の増加のみではなく、少なくともカナン文明の工業技術や文化の水準は非常に高かったと思われる。金属の工具やあらゆる種類の道具は、生活を楽にするのに大変役立つし、それと共に楽器は感情や芸術感覚を刺激するのに役立ちました。これらの多くの文明の側面はよい目的のために用いることができますが、そういった目的には、もはや使われず、むしろ神への反逆の手段として用いるようにさえなったのです。この神への反逆のことはカインの子孫たちの間で起こった結果であり、目的でさえあったと思われる。

四章一六〜一七節　それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。さて、カインは、その妻を知った。彼女はみこもり、エノクを産んだ。カインは町を建てていたので、自分の子の名にちなんで、その町にエノクという名をつけた。

恐らくカインは、カインとアベルが犠牲の供え物を持っていったエデンの園の近くと想定される所、すなわち、「主の御前から」立ち去った時、エデンの園をも後にして東方に旅立ち、ノデの地に行きました。ノデは「当てもなくさまようこと」を意味するところから、これは地理的地域ではなく、その時からのカインのやむことのない生活様式をたとえて言ったにすぎない可能性があります。

しかし、次の節では、カインが建てた都市について述べているので、彼がしばらくの間ノデの地に住んだことは事実と思われる。ノデの地で、彼の妹である彼の妻は最初の息子エノクを産みました。この名はお

そらく「奉納」とか「開始」という意味で、おそらく、かつてエデンの地で両親と共にしていた生活とは全く異なる生活をこの地で始めるのだと自分自身にカインは言い聞かせていたことでしょう。カインが建てた都市に対する言及は、彼が地のさすらい人となるという神の預言を拒み通そうとの試みをおそらく示していることでしょう。彼の意図はどうであろうと、ヘブル語の動詞は不定詞で「建てていた」であり、おそらく、彼はそれを建て始めたが完成しなかったことを暗示しています。そしてその都市に息子にちなんで名をつけ、息子エノクと共に仕事を完成し、真のカナン文明を始めるために、彼はそこを去って他の地に移り住んだことでしょう。

進化論に立つ人類学者が「石器時代」文明を、文明社会の出現と同一視するために用いるしるしの一つは都市化の発展であることは興味深いことです。聖書によれば、最初のこのような都市（小さく簡単な状態ではまったことは疑い得ない）はアダムの生きていた時代にカインによって築かれた町です。この発展には百万年もの長期間を要したではありません。

四章八〜二節 エノクにはイラデが生まれた。イラデにはメファヤエルが生まれ、メファヤエルにはメトシャエルが生まれ、メトシャエルにはレメクが生まれた。レメクはふたりの妻をめぐった。ひとりの名はアダ、他のひとりの名はツィラであった。アダはヤバルを産んだ。ヤバルは天幕に住む者、家畜を飼う者の先祖となった。その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。ツィラもまた、トバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋であった。トバル・カインの妹は、ナアマであった。

ここにカインの主な子孫の名が挙げられています。すなわち、エノク、イラデ、メフヤエル、メトシャエル、レメク、さらに彼の三人の息子ヤバル、ユバルとトバル・カインです。明らかに、イラデ、メフヤエル、メトシャエルの名が挙げられています。これは主としてレメクにいたる直系の人々でカインの子孫で最も有名な人々であったからです。そして、おそらく、二人の名前のつづりの終わりにエル、すなわち神の名がつけられている故でもあります。この事実は、おそらくこれらカインの直系の人々でさえ、神を信じ続けていたが神に従わなかったことを示しています。

権威者たちはイラデは「町の人」を意味し、メフヤエルは「神が生命を与える」を意味し、メトシャエルは「神の人」を意味すると考えています。これらは疑わしいのですが、レメクは「征服者」を意味するのかも知れません。

レメクはカイン族が神に公然と反逆するように道を開いた人と思われると思います。レメクは神が制定された一夫一婦制の原則を無視して二人の妻アダとツイラをめぐりました。これはアダムから七代目でした。それはちょうどセツの家系の神のような人エノクと同じ時代でした。この二人の妻は魅力的（アダは装飾を意味し、ツイラは色合いを意味する）な婦人たちでした。そして、肉体的な強い性欲はレメクの行動の第一要因であった可能性があります。

この時代にどのような手段で結婚が整えられ、また合法化されたかを示す記録は聖書のどこにもありません。レメクは明らかに力ある繁栄した人であり、二人の妻は意識的にこの夫婦関係、すなわち、重婚関係に入つたと考えるのが妥当だと思われれます。

さらに動機として考えられることは、重婚ならより多くの息子を得ることが出来る見込みがあるからかも知れません。当時の社会機構は、族長制に基づいており、組織化された政府はなかったと思われます。それゆえ、その個人に属する一族が多ければ多いほど、ますます富も権力もそれに伴って増し加わったはずで、いずれにせよ、重婚は明らかに神のみこころに反するものでした。それにもかかわらず、多くの息子たちが生まれました。それらの内の三人は、特に洪水前の文明の発展上注目すべきものでした。ヤバル「さすらい人」はテントを作り上げて、家を持ち運べるようにし、放浪生活を発展させました。また彼は、アベルの羊の他にも動物を飼いならし、商業の目的で、生産する生活体系をも発展させました。ここで用いられている「家畜」は雌牛、山羊やその他の動物と共にラクダやロバ（出九・三）をも含んでいます。おそらく、このことは彼の時代の人々が果実や野菜と共に肉をも食べる習慣を得ており、こうして神の最初の命令の他の部分にも従わなかったことを示唆しています（創一・二九）。さもなければ、おそらく家畜を他の目的、すなわち、荷物を運んだり乳をしぼったり毛皮を着物その他に用いるなどの商業上の目的で生産していただけということになります。

ユバル「音響」は兄のヤバルとは全く異なった生来の能力を持っていました。彼は音楽的な耳を持ち、營利的なことよりも審美的なことを好みました。それにもかかわらず、彼は発明の天才で、弦楽器と管楽器を創作しました。これはすみやかに、官能的なカインのすえに興味を引き起こさせました。そしてまた、ユバルは疑いもなく、彼の発明品により経済上の利益を得たことでしよう。

彼らの異母兄弟のトバル・カインは、青銅と鉄を用いて色々な道具を作る発明者であったことは明らかです。彼の名前の意味は確かではありませんが、言語学的にはローマの神バルカンの名の元祖であるように思われ

ます。彼は「青銅と鉄のあらゆる用具の鍛冶屋」であつたと言われています。したがって、彼の発明に関する才能は、実に天才的なものでした。洪水前の人々、特にカインのすえの「生活水準」はこれらレメクの才能豊かな息子たちによつていちじるしく高められました。また、トバル・カインには著名な妹のナアマ「楽しい」がいました。

ここでもう一度まとめますと、近代の進化論に立つ考古学者や人類学者が、石器時代の人々が真の文明へ開花するのに貢献したとするもの、すなわち、都市化、農耕、牧畜と冶金術、これらのすべてはアダムと初期の子孫がいちはやく完成したものであり、数十万年もかかる必要はなかつたのです。

近代文明の重要な側面である楽器やその他のものもまた初期に発展しました。さらに、これらのものすべては、正式な伝達のために文字による記載が同時に必要であつたことも確かです。このことはさらに、創世記五章一節で「記録・本」ということばを用いて暗示されています。最近の考古学上の発見は、今日、初期の人々が高度な工業技術を持っていたという見解が正しいことをますます明らかに証明しています。こうして、この聖書の記述の正しさを間接的に確認しているのです。

四章二三〜二四節 さて、レメクはその妻たちに言った。「アダとツィラよ。私の声を聞け。レメクの妻たちよ。私の言うことに耳を傾けよ。私の受けた傷のためには、ひとりの人を、私の受けた打ち傷のためには、ひとりの若者を殺した。カインに七倍の復讐があれば、レメクには七十七倍。」

カインの経済学によると、神の呪いの影響から逃れようとする文明の企ては次のようなものです。

- ① 「農耕」の代わりに、都市生活は好ましい。
- ② 農業に必要な定住生活の代わりに、遊牧生活が好ましい。
- ③ 土地で栽培した食糧で満足する代わりに、人は肉食になったので、家畜の飼育を始めた。
- ④ 呪いの「労苦」を和らげるため、冶金術や道具の製作が発展した。
- ⑤ 悲しみを和らげるために楽器が発明された。
- ⑥ 一夫一婦制に固執する代わりに、一夫多妻制が取り入れられた。
- ⑦ 金属武器が発明され、それらを扱う才能のある者たちは、他の人たちよりも優位な立場になった。
- ⑧ ここに記されているレメクの詩のように、また、人の詩や著作にしばしば見られる特徴のように詩的誇りは、人の自己満足と神からの独立を主張した。

都市は、相互活動と趣味、技術、家畜の飼育、音楽、詩歌などの共同社会をもたりました。これらのことのほとんどは、神が初めにヒトに地を従わせ、それを支配せよと命じられたことに対する人間の適切な応答とみなすことができます。もし、共同社会を神の命令に対する応答とみなすなら、仲間のため、また、神の栄光のために、これらをつかさどる神の執事としての人間の働きとして適切とみなすことができます。人の歴史で、神に従う人々よりも神に反逆する人々が初期の文明を培ったということは不幸なことでした。そして、このことは特に洪水前の文明においては真実でした。

特にセツ系のエノクと同世代のカイン系の七代目のレメクは、当時の精神発達の状態を悲惨にも反映しています。彼の性格は、保存されている彼の詠んだ歴史上最も古い詩の断片からうかがえます。これは二人の妻アダとツィラに対して歌われたもので、レメクの格闘に対する勇敢さや彼に反対すると見られる者には致命

的罰を加えるといった確信を誇っているものです。古代のユダヤ伝説では、レメク自身が彼の祖先であるカインを実際に殺したとも言われていますが、これは事実無根の伝説に過ぎないでしょう。

レメクは自分の息子によって鍛造された青銅や鉄の武器を所有することで優位にあり、安全を感じていました。しかし、おもしろいことにはレメクの聴衆はただ二人の妻だけでした。彼が実際に他の人々との対立を恐れていたかどうかは推測の域を出ません。

レメクの詩において最も注目すべきことは、神への大それた冒瀆の感情です。神は祖先であるカインを罰するに当たってカインを殺すものがあれば七倍の罰が下るという注意を促していたにもかかわらず、ここでレメクは実際に、「もし、カインを殺す者に七倍の仕打ちをされるなら、私を傷つける者には七十七倍の復讐があることを私は保証する」と言っています。

このことについて新約聖書に興味深い引照箇所があります・キリストはレメクのそれとは対照的な態度で私たちに命じておられます。キリストはペテロに七度とか七十七度ではなく七度を七十倍するまで兄弟を赦すべきだと告げられました（マタ一八・二二）。

墮落から洪水までの期間には、人の行為などを規制するような組織化された法律も政府もなかったと思われれます。しかし、アダムは神からの呪いの宣告と共に来るべきキリストについての神の約束と血の犠牲を通して神に近づくための中間の準備に関して、確かに子どもたちに教えました。人の行動や信仰の基準を定めるように規定する働きもありませんでした。

アダムからノアに至る直系の族長たちのうちに、特にアダムの忠告に注意し、神のみことばに従った人たちが何人かいたことは確かです。しかし、ほとんどの人は「カインの道」を行くことに甘んじました（ユダ

一一節。

すなわち、当時の科学や工業技術の急速な発達によつて生じた肉体的快樂や利点は、間もなく、「地上に人の悪が増大」（創六・五）する結果をもたらしました。それぞれの人及びそれぞれの部族は、その力や能力の許す範囲で、何でも好き勝手なことを行ないました。ある場合には、他の人に力や能力がまさっているかどうかという基準以外には、人を束縛するものもなかつたのです。こういうわけで、人にとつて法律や政府は絶対的に必要であり、自分の気ままにさせるべきではないことはずっと以前に論証されてきました。したがつて、洪水の後、神は正式に、人間社会に政治のしくみを設けられました（創九・六）。

レメクの詩から、周囲にいた男たちがアダとツイラを誘惑して力づくでレメクから奪おうとしていたことや、さらに、二人の妻たちはそのことをいやがつていなかつたということを読み取ることも可能です。このことは、レメクの威嚇がなぜ特に二人の妻たちに向けられていたかを説明してくれるでしょう。とにかく、カインの子孫に性的な締りのなさが増大していたことを、創世記六章一節から四節、及びマタイの福音書二四章三八節は示唆しており、このことは、当時は一般に肉欲に走り無差別な性行為がはびこつていたことを裏づけるものです。

四章二五、二六節 アダムは、さらに、その妻を知つた。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて言った。「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに、神は私にもうひとりの子を授けられたから。」セツにもまた男の子が生まれた。彼は、その子をエノシユと名づけた。そのとき、人々は主の御名によつて祈ることを始めた。

アダムからセツに至る子孫の記録の強調点は大いに異なっています。そこにはヒトの達成したことに対する誇りを読み取ることはできず、むしろ「人々は主の御名によって祈ることを始めた」のです。たとえ、カインの子孫が、ヘビのすえの開花状態を示していたとしても、なお神は、約束の女のすえが真実であることを主張しつづけていたのです。

第一に、神はエバに「カインがアベルを殺したので、彼の代わりに……もうひとりの子」を準備されました。セツという名前は「授ける」とか「代わりに」という意味で、神の約束がこの息子を通して最終的に成就するとの信仰をエバが持っていたことを示しています。ここで興味深いことは、普通、父親が子どもの名をつける（四・二六）のが一般的であるのに、ここでは母親が子どもに名をつけたということです（四・二五）。多分、子どもの名をつけるというような重要な決定においては、すべての夫と妻の相互において協議がなされていたことをこのことは示しています。

そして、セツの子エノシユ（意味「死ぬべき弱さ」）であり、セツが深い霊的必要性を感じていたことが暗に証明されている）の時代に「人々は主の御名によって祈るごを始めた」と記されています。おそらく、このことばは主への定期的な公式礼拝の始まりを表わすものです。そして、以前にカインやアベルが行なっていた、神との個人的な会合の代わりをなすものと思われる。また、このことは、祈りの始まりでもあり、もはや神との直接の交わりが不可能であったことを意味しています。

ともかく、「主の御名によって祈り始めた」ということは、疑いもなく信仰行為を意味しています。おそらく後の時代に、またこの時代においてさえ、祭壇が築かれ、いけにえをささげることが行なわれていたのだしよ

う（創一・二・八、一三・四、二六・二五、I列一八・二三、二四など参照）。

主の御名は、主そのものであり主の行為のすべてを表わしていて、主のみことばに信頼するすべての人に對して約束と救いを与えます。後になって、ことばでは決して言い表わすことのできない神聖なもののみなされました（出二〇・七、レビ二四・一六）。

神御自身が罪のために永遠の大きいいけにえを準備されたあのカルバリ以前には、人々は主の御名を呼びつつ、彼らの魂の贖いのために何度も何度も祭壇に血を注いでいけにえをささげなければなりませんでした（レビ一七・一一）。しかし、カルバリ以後は、人が永遠に救われるためには、主イエス・キリストの御名を信仰をもって呼ぶだけでよいのです。なぜなら、「主の名を呼ぶ者はみな救われる」からです（ヨエ二・三二、使二・二二、ロマ一〇・一三）。イエスはキリスト（救い主）であるばかりでなく、神御自身、主なる神、永遠に「います方」です。彼こそ主イエス・キリストです。「神は……すべての名にまさる名をお与えになりました。それは……すべての口が『イエス・キリストは主である。』と告白する……ためです」（ピリ二・九―一一）。

ある人たちは創世記四章二六節と出エジプト記六章三節との間には矛盾があることを示唆しています。神がモーセに彼の祖先に関して語られた時、「主という名では、わたしを彼らに知らせなかった」と言われました。これは神がこの時初めて、この特別な御名でご自身を現わされたかのようなことです。この問題は神が語られたことばを質問形にすることで容易に理解できます。すなわち、「主という名では、わたしを彼らに知らせなかったのか」となり、これは反対語疑問形で、明らかに肯定的な答え、つまり「そうだ知らせたのだ」となるのです。ヘブル語の文章には句読点が直接につけられていないため、強調されているところや区切りは文

脈から見いださなければなりません。この場合は、まさにそうすることが適切に思われます。確かにイスラエルの族長たちは、自存、永遠、不変、そして人間に御自身を啓示される方というエホバという名が意味している神のご性質を知っていたのです。実際に、どういう言語を使い何という名を使ったかは分かりませんが、その特別な御名はヤハウエであり、彼らは啓示された通りに神の御名を受け入れ、呼び求めたのです。

約束のすえの系列

確かに、神の権威はセツ族の中に認められつづけたものの、彼らもカイン族と同じく墮落した民族の仲間でした。創世記五章一節で、著者は、再び、神が人を「神に似せて」創造されたことを思い出させています。しかし、それから三節で、アダムは「彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子をセツと名づけた」と述べています。アダムとセツとの間に墮落が入り込んだのです。アダムは神に似せて造られました、セツはアダムに似せて生まれたので、父親の墮落した性質を受け継いだのです（ロマ五・二一―二四）。

創世記五章で、洪水前の十人のイスラエルの族長の記録を見ると、三つの事実が強調されているように思われます。すなわち、①神は適切な家系と年代資料をもって、お定めになったやがて来られる約束のすえの系図を保存し、記録してきた。②「生めよ、ふえよ」という神の命令は実行された。なぜなら、記録はその家系図の各人が「息子や娘を生んだ」と詳しく述べている。③神ののろいもまた実行されていた。なぜなら、

各人は数百年も生きたにもかかわらず、結局は「死んだ」のである。

ここに挙げられた洪水前の人々の名前と年齢のリストは、一見、単調で退屈なようにも思われますが、さらに注意してみると、これらは実に有意義で興味をそそるものとなります。この部分は、かつて人が、ほぼ千年も生きることができたこと、さらに、最初の世界の環境のすばらしさを跡づけることができることを私たちに告げています。それはまた、人々がこのような長い生涯を通して、子を産むことができたことを示しています。例えば、エノクは六十五歳で、ノアは五百歳で息子を得たのです。もちろん、ここに挙げられた名前が、必ずしも長男であったとする理由はありません。このリストの最初にあるセツはアダムの三男でした。セムは多分、ノアの次男か三男であったこと（創一〇・二二）でしょう。ここに記録された名前は、約束されたすえの直接の祖先に当たる人々の息子の名前です。

五章一〜二節　これは、アダムの歴史の記録である。神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、男と女とに彼らを創造された。彼らが創造された日に、神は彼らを祝福して、その名をアダムと呼ばれた。

五章の最初の部分は、創世記の重要な区切りとなっています。「これは、アダムの歴史の記録である」と書かれているのは大切です。記録はこのように、ただことばで伝えられたのではなく、書かれたのです。アダム自身がこの部分（二、三、四章）を書いた可能性が十分にあります。なぜなら、これら三つの章は前記の陳述とアダムのサインとでしめくくられているからです。同様に、おそらくノアは、五章一節後半から六章九節前半までの原著者であったことでしょう（創六・九）。

カインの子孫の記録が、アダムから七代目のレメクの行為で終わっている点に注意すると大変興味深いものです。五章の年代で、アダムから七代目のエノクが生きている時代（訳者注・単純計算でエノクが三〇八歳の時）にアダムが死んだことが分かります。このことは、カインは家族と断絶状態にありましたが、アダムは生きている間にカインやカインの子孫をよく知っていたことを示しています。そして、前にも述べたように、この時期までは、カインの子孫の中に、父アダムの神に対する信仰がまだいくらあったようです。

旧約聖書では、五章一節に初めて記録「欽定訳で book」（または「聖書」と言ってもよい）ということばが出て来るのに対して、新約聖書では、マタイの福音書一章一節の「イエス・キリストの系図」ということばで系図「欽定訳では book (of generation)」ということばが初めて出てきます。この点に注意するのもまた大変興味あることです。

こうして、最初の記録は、最初のアダムの起源を述べていますし、第二の記録は、「天から出た主」（一・一五・四七）であり最後のアダムである方の由来について語っているのです。

ここでもう一度述べておきたいことは、「アダム」も「人」も同じヘブル語の単語の訳であることです。そのことばが一般的に「人間」を意味するのか、それともアダム自身を意味するのかは前後関係によって決めなければなりません。こうして、二節はおそらく次のように読むべきでしょう。「神は男と女に彼らを創造された。そして、彼らが創造された時、彼らを祝福し、彼の名を『アダム』というより）男と呼ばれた。」

これらの節は明らかに、一章二六節から二八節に関係があります。その理由はこの新しい区分をさかのぼって最初の記録に結び付けるためです。最初の区分は「天と地」の経緯（二・四）であり、そして「アダムの歴史」（五・一）がちょうど完成し、ここから後「ノアの歴史」（六・九）の記述がまさにされようとしています。ノ

アの記録は、人類の系統と特に約束の家系にいたる公の歴史として確認することが必要でした。さらに、この要約は、創造の日からセム、ハム、ヤペテの誕生までの洪水前の族長たちの完全な記録となつていゝのです。そういうわけで、創造からノアの洪水までの歴史の年代的枠組みを提供しているのです。

五章三〜五節　アダムは、百三十年生きて、彼に似た、彼のかたちどおりの子を生んだ。彼はその子ノをセツと名づけた。アダムはセツを生んで後、八百年生き、息子、娘たちを生んだ。アダムは全部で九百三十年生きた。こうして彼は死んだ。

五章五節はアダムの死亡宣告をしています。こうして、三章一九節でアダムに宣告された死が肉体の面でも成就し、すべての人にとって「罪から来る報酬は死です」（ロマ六・二三）ということを確認させたのです。しかしながら、アダムは死ぬまでに、九百三十年という長い人生をおくり、たくさん息子や娘たちを生み、またその子供たちも多くの息子、娘たちを生んだことでしょう。

これらの息子、娘たちはセツの後に生まれたことをほのめかしています。すなわち、セツが生まれた時、アダムはすでに百三十歳になっていたのです。エバがカインやアベルを生んでから次の子を生み始めるまでに、こんなにも長い期間が、経過しているのは不思議に思われます。恐らく、彼がアベルの悲劇でもたらされた悲しみに打ち勝ち、後にアブラハムとサラの場合になされたように、祈りと信仰を強めるために、神が計画的にこんなにも長い間、エバに子をお与えにならなかつたのでしよう。

彼らはセツが生まれる前に他の子供たちを生んだ可能性もあります。しかし、神がセツだけを示している

ということとは、セツが神が啓示された唯一の子供でアベルの眞の代わりであり、子孫が約束を受け継ぐ唯一の息子であったためでしょう。こう考えると、カインの追放、彼の妻や彼の町に関する先の物語が、年代との関係でもうすこしよく理解できるでしょう。

五章六〇節 セツは百五年生きて、エノシユを生んだ。セツはエノシユを生んで後、八百七年生きて、息子、娘たちを生んだ。セツの一生は九百十二年であった。こうして彼は死んだ。エノシユは九十年生きて、ケナンを生んだ。エノシユはケナンを生んで後、八百十五年生きて、息子、娘たちを生んだ。エノシユの「生は九百五年であった。こうして彼は死んだ。ケナンは七十年生きて、マハラルエルを生んだ。ケナンはマハラルエルを生んで後、八百四十年生きて、息子、娘たちを生んだ。ケナンの一生は九百十年であった。こうして彼は死んだ。マハラルエルは六十五年生きて、エレデを生んだ。マハラルエルはエレデを生んで後、八百三十年生きて、息子、娘たちを生んだ。マハラルエルの一生は八百九十五年であった。こうして彼は死んだ。エレデは百六十二年生きて、エノクを生んだ。エレデはエノクを生んで後、八百年生きて、息子、娘たちを生んだ。エレデの一生は九百六十二年であった。こうして彼は死んだ。

ここで、洪水前の族長たちの長い伝記物語を始めています。すなわち、それぞれの名前、約束の系図の次の世代ができた時の年齢、それぞれが息子、娘たちを生んだ事実、そして最後に彼らの死亡年齢が記されています。アダムからノアまでの系列の中に、全部で十人の族長たちがいました。その資料は次の表にまとめられています。

族長	誕生年	跡継ぎの族長が生まれた年	死亡年
アダム	—	一三〇	九三〇
セツ	一三〇	一〇五	一〇四二
エノシユ	二三五	九〇	一一四〇
ケナン	三二五	七〇	一一三五
マハラルエル	三九五	六五	一一九〇
エレデ	四六〇	一六二	一四二二
エノク	六二二	六五	九八七*
メトシエラ	六八七	一八七	一六五六*
レメク	八七四	一八二	一六五一
ノア	一〇五六	五〇〇	二〇〇六

*エノクは死んだのでなく移された。

**メトシエラは洪水が起こった年に死亡。

この記録に何らかの記録もれがあると考えられる理由はありません。また、一年は現在の三百六十五日ではなく、元来三百六日であったという滑稽な可能性を除いて、これらの年が通常用いられている年以外のものだと考える理由もありません。これは全くありのままに率直な記録であり、約束の血統と洪水前の歴史に関して、

唯一の信頼できる年代の枠組みを表示するために必要な系図上の資料を与えようと意図したものです。

可能性を完全に除外もできませんが、その証拠もないので、これらの系図に欠けたところがないと仮定すれば、創造から洪水まで全部で一六五六年ということになります。これらの年代は、七十人訳聖書や他の古代訳では幾分長くなっていますが、ほとんどの学者たちは、なんらかの理由で人為的に延長されたので、マソラ本文が最初の数を維持していると考えています。

この記録を文字通りに取るとおもしろいことがわかります。つまり、アダムはノアの父レメクが五十六歳の時まで生きていたし、ノアはセツがなくなつてわずか十四年後に生まれたことになります。生きていた族長たちの最も年長者が、神のことは保持し、同時代の人々に語り広める責任を負っていたようです。エノクとレメクはそれぞれ親より先に死んでいるために、ノア以前にこの責任を負った人はわずか七人となります。このことは、恐らくペテロの手紙第二二・二章五節においてノアが、「古い世界」にいた「八人の義の宣伝者」と呼ばれている理由を説明していることでしょう。

時々、批評家たちは、カインとセツの各々の子孫の名前に共通点があることを挙げ、二つのリストは元来、一つであった最初のリストに不正に手を加えたしるしだと主張しています。もちろん、このような示唆は全く不適當で、全く独断的なものです。確かにいくつかの類似点は見られますが、それは二つの家系が互いに支えあう必要があつたに違いないので時々行き来があつたことと、命名に当たっては互いの親戚や顕著な出来事や環境などと関連づける傾向が一般的であつたことを考慮すれば説明できます。それぞれの名前の意味はあいまいですが、大体、次のようになります。

セツ	任命された者
エノシユ	致命的もろさ
ケナン	かじ屋
マハラルエル	神をほめたたえよ
エレデ	没落
エノク	献身
メトシエラ	彼が死ぬ時裁く
レメク	征服者
ノア	残れる者

エノクを除くこれら族長たちが、平均九百十二歳の長寿であったことと肉体面からその可能性があった理由についてはすでに述べました。多くの学者たちは、人の寿命はノアの洪水後、徐々に、しかも確実に短くなってきたこと。このことは、明らかに洪水前の気象や環境条件との関連性を示していることに気付いていました。ギリシアの歴史家ヘロドトスから、エウゼビオスが引用した有名なバビロンの初めの十人の王たちの一覧表で、当時の状況を部分的に確認することが出来ます。しかし、この名簿に載せられている人の実際の年齢は、まったく信じられないような年齢で、それぞれ六万五千年なのです。

全体としてみて、五章にあるこの名簿は、すべての面からありのままの歴史として受け入れるべきで、それを否定する理由はありません。もちろん、これらの名前は、歴代誌第一、一章一節から四節とルカの福音書

三章三六節から三八節に繰り返されています。このことは、旧約聖書と新約聖書を書いた後の聖書記者たちが、これらを歴史的なものとして受け入れたことを確証するものです。

エノクの驚くべき事件

四章の記録で、レメクの悪い性質を驚くほど顕著にうかがえるのと同時に、五章の記録では、簡潔ですが、レメクと同時代の人であったエノクが、神に似た性質の人であったことを実によく見抜くことができます。セツの子孫でアダムから七代目のエノクは、カインの息子と同じ名前でした。カインの子孫で、アダムから七代目のレメクはノアの父親と同じ名前でしたが、彼らの性格はまったく異なっていました。

エノクは「神とともに歩んだ」神の預言者でした。そういう資格で彼は、同世代の神を信じない人々に恐ろしいかざちのようなことばで、「見よ。主は千万（または無数の）の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行ない、不敬度な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである」（ユダ一四、一五節）と説教しました。エノクがこれらのことばを語った時、あたかもエノクは、レメクを特に心に思い浮かべていたかのように思われます。もちろんこの部分はまた、エノクが自分と同時代の、不信心な神を敬わない人々に対して、預言者としての重荷を負っていたことを実質的に物語っています。

私たちが今日キリストの再臨として認めている事柄を、エノクが洪水前に預言したこのことばは驚くべきですが、明らかに、これはユダによって当てはめられた意味なのです。実際に、それは多分、三章一五節の大預言、すなわち、最終的にあのヘビであるサタンとサタンのすえの頭を踏み砕く約束の拡充および説明と考えてよいでしょう。神は洪水前の人々にさえ「あかしをされないでおられたのではありません」。約束された「来りつつある」さばきは、ノアの大洪水によって予備的に前ふれとして成就しましたが、最終的には主イエス・キリストの栄光ある来臨と勝利によって成就します。

ユダの手紙にある引用文は、エノクによって書かれたとされている三つの外典のうちの一つから引用されたと思われるが、実際にはおよそキリストの来られる一世紀前のものです。これらの書物には多くの興味深い資料があり、その多くは確かに作り話ですが、エノクの預言のいくつかの伝承が、モーセや他の著者に伝わった他の記録と同じ方法で、次から次へと伝えられてきたのかも知れません。少なくとも、ユダは、神の靈感によって、真にエノクが書いたものとしてこの特別な一片の文章を組み入れています。

五章二一〜二四節　エノクは六十五年生きて、メトシエラを生んだ。エノクはメトシエラを生んで後、三百年、神とともに歩んだ。そして息子、娘たちを生んだ。エノクの一生は三百六十五年であった。エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなつた。

エノクが神とともに「歩んだ」という表現は、罪が入り込む以前に、アダムがエデンの園で神とともに歩んだという文字どおりの意味とは、おそらく違っていたことでしょう。エノクは、すべての人と同様に罪の

性質を持っていたので、神が後に、ときどきアブラハムやモーセの場合にされたように、神ご自身の顕現に当たってご自身の栄光を覆われたのでなければ、エノクも實際上、神を見てなお生きていることは肉体的にできなかったはずですが。ともかく、「信仰によって」(ヘブ一・五)、また、祈りと神のみことばに従うことによつて、エノクは神との親しい交わりを保つたのです。今日、私たちも同じようにこの恵みにあずかることができるのです(コロ二・六、ガラ二・二五、一コリ五・七)。ここで神とともに歩むという意味は、すばらしい家庭生活をおびやかしたり、または、当時の不信仰な者や邪悪な者に対して声を出して強く反対するのを邪魔するような、神秘的な敬慶をよそおうような歩みではなかったことに気づくことは大切です。

エノクのあかしのクライマックスは、歴史上類のない出来事だということです。「信仰によつて、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました」(ヘブ一・五)。これは、創世記の「神が彼を取られたので、彼はいなくなつた」という節の靈感された解釈です。エノクは、ともかくも、超自然的に実際に肉体のまま天にあげられました。そして、エノクは今もそこにいるのです。

それから二十五世紀近く後で、預言者エリヤも同じように死なずに天にあげられました(Ⅱ列王一・一)。エノクがアダムとアブラハムとのほぼ中間の時代に、エリヤがアブラハムとキリストのほぼ中間の時代にそれぞれ預言したこと、さらに、両者とも、ひどい背教の時代に神に仕えたことは大切です。

これら二人の聖徒が移されたのは、おそらく、主イエスが再び来られる終わりの時に生き残つていて、キリストに信頼している人々が移されるという約束の型なのでしょう(Ⅰテサ四・一六、一七)。

しかし、この二つの事件は、厳密に言えば同じではありません。なぜなら、この聖徒たちの携挙は、復活と栄化とが同時に起こるからです。このようなことは、キリストの復活と栄化に先だつて起こることはあり

えなかつたからです（Iコリ一五・二二、二三、五一～五三）。

他の族長たちのすべては「彼は死んだ」と言われていますが、このことはエノクには言われていません。「彼は神とともに歩んだ」は二回言われています。神がエノクを取り扱われた独特な方法を説明する目的で、繰り返して述べられたのでしょうか。神はエノクを死なせずに生きたまま取り去られることで、洪水以前の人々にも、生命は現在だけでなく、その後もなお続くということを示されたのです。神がどこに彼を連れて行かれたかという問題への答えは、その時点ではありませんでした。

しかし、それがどこであれ、神がおられるところであつたに違いありません。この考えは全くばかげた字義どおりの解釈だと思う人もいるでしょうが、エノクの肉体は、後のエリヤの身体や復活したキリストの身体のように、天のどこかの場所に移されたというのが、この問題に関するすべての聖書の記述に矛盾しないただ一つの結論であるように思われます。主イエスは、今、私たちのために場所を用意しています（ヨハ一四・三）。そして、いつか、新しいエルサレムが地球（地球は新しくされますが、この地球以外のなものでもありません）に「天から下つてきます」（黙一一・二）。

天地創造以来、地球の外のどこかに天と言われる実際の場所があり、そして、ありつづけてきたのは明らかで、そこに神の宮と神の臨在の中心があるのです。

エノクとエリヤが死なずに移されたことに関し、一つの面白い可能性が考えられます。それは、神が、将来エノクとエリヤに与える使命、すなわち、来るべき大患難時代に、神の二人の証人として神に仕えさせるためという考えです。これらの証人は、ゼカリヤ書四章一四節にある「全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者」と同じだとみなされています。これらの油そそがれた者、これらの証人は、「あかしを終える」

と殺され、生き返り（黙一・七、一二）、天に移される事実からも明らかかなように真の人であつて天使ではありません。しかし、もし、彼らが肉体を持った人であつて、ゼカリヤの時代にもなお主のそばに立っていたとするならば、ゼカリヤの時代よりも前のいつの日にか世に生まれていなければならなかつたはずですが、ともかく、何世紀の間、天にいて、彼らは死なないでいなければなりません。聖書から私たちが判断できる限りでは、エノクとエリヤだけが、このような特別な条件に合うのです。

ある人は、モーセとエリヤが、律法と預言者とを代表する証人であるかと考えています。なぜなら、彼らは、変貌の山でキリストと共にいたからです（マタ一七・一、四）。

しかし、これらの証人のひとりがモーセであるとは、きわめて考えにくいのです。なぜなら、「人間には、一度死ぬこと……が定まっている」（ヘブ九・二七）とあるように、モーセは一度死んだからです。エノクとエリヤはまだ死んでいませんし、少なくともエリヤは、再び地上にもどり宣教する計画がはっきり定まっています（マラ四・五、六、マタ一七・一一）。

もちろん、ある人々は事実上ラザロやドルカスの例のように一度ならず死を経験しています。しかし、これらの場合、彼らの肉体は奇跡的にしばらくの間、生き返つただけです。モーセの肉体が生き返つたとは聖書のどこにも見当たりません。けれども彼に関しては、主ご自身が彼を葬り（申三四・五、六）、また、御使いのかしらミカエルが、モーセのからだについてサタンとの間である種の言い争いをした（ユダ九節）と記されていますので、エノクやエリヤと同じように、実際に肉体の状態で死からよみがえり、天に取り去られたと考えることもできるでしょう。しかしながら、これはきわめて根拠の薄い想像です。もし、このようなことが実際に起こつたなら、そのことを聖書がはっきり記述していないのはおかしいことです。

もちろん、モーセが本当に肉体をもって、エリヤと共に変貌の山に現われたとするなら、彼の肉体が蘇生（せい）した可能性も十分に考慮されなければなりません。しかし、他方、マタイの福音書一七章九節で、それは「幻」であったとキリストがはっきり述べておられるのですから、その時の顕現は、実際の肉体で現われたのではなかった可能性もあります。

もちろん、この幻がモーセとエリヤであったと考えるのは当を得ています。なぜなら、顕現の目的は、キリストによつて成就するユダヤ人に約束された神の王国と、エルサレムで遂げようとしておられるご最期（ルカ九・三二）に關係があつたからです。モーセもエリヤも、共にユダヤの律法の下に神に仕えたのに、エノクは律法の与えられるはるか前の人でした。しかし、大患難時代は「ヤコブの悩みの時」（エレ三〇・七）でもあり、異邦人へのさばきの時でもあります。それで、イスラエルと全世界にみことばを宣べ伝える二人の神の証人としてエノクとエリヤこそ最もふさわしいのです。

この二人の証人は、キリストの復活と昇天の時にそばに立っていた二人の人（ルカ二四・四、使一・二〇）と同じであつた可能性さえあります。「主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者」（ゼカ四・一四）の使命とも関連しています。ヨハネが彼らを「御使い」（ヨハネ二〇・一二）と呼んでいる事実は、おそらく、この場合「御使い」ということばが、単に「メッセンジャー」を意味し、しばしば人との関連で用いられている事実から、説明できます。

いずれにしても、ノアの洪水前のすばらしい預言者エノクは、彼が神と共に歩んでいた時に、急に移されて地上からいなくなつたのであり、神を認めない世代に対するあかしの使命をやがて完成することでしょう。

五章二五〜二七節　メトシエラは百八十七年生きて、レメクを生んだ。メトシエラはレメクを生んで後、七百八十二年生き、息子、娘たちを生んだ。メトシエラの一生は九百六十九年であった。こうして彼は死んだ。

エノクの預言者としての務めの中でさらに興味深いのは、彼が六十五歳の時に生まれた息子メトシエラにつけた名前が示唆していることです。族長たちの大変長い寿命は、実際の年で数えられたもので、ある人が考えているように月ではありません。このことは、このような解釈では、エノクはわずか五歳の時に息子を生んだことになるから有り得ないことは明らかです！

この名前の意味は、多くの学者は「ヤリを持った人」を意味すると言っていますが、確かではありません。しかし、このような名前を自分の愛する息子に選ぶという性質がエノクにあったとは、まず考えられません。昔の、また現在の多くの注解者がメトシエラという名前を、「彼が死ぬ時に〈何か〉贈られるだろう」という意味であると解釈してきました。もし、この考えが正しければ、そして、少なくとも一つの根拠がありますが、来るべきさばきの預言者エノクが、この息子が生まれた時に、来るべきノアの洪水のさばきについて特別の啓示を受けていた、と推測するのが妥当でしょう。

しかしながら神は、メトシエラが生きている間は、洪水によるさばきは行なわれないと約束されました。それゆえ、エノクは預言者としての警告と約束を記念して、名前をつけました。メトシエラは年齢が記録されている歴史上の人物の中で最も長生き（九百六十九年）したことは、意味のあることでしょう。「主は……あなたにたが対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです」（Ⅱペテ三・九）。主は、現在、神を信じない人々に対して忍耐深くあら

れるように、「昔、ノアの時代に、箱船が造られていた間、神が忍耐して待つておられた」(1ペテ三・21)とあるように、主は昔も忍耐しておられたのです。

五章二八〜三二節　レメクは百八十二年生きて、ひとりの男の子を生んだ。彼はその子をノアと名づけて言った。「主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦勞しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう。」レメクはノアを生んで後、五百九十五年生き、息子、娘たちを生んだ。レメクの一生は七百七十七年であった。こうして彼は死んだ。ノアが五百歳になったとき、ノアはセム、ハム、ヤペテを生んだ。

メトシエラの息子レメクは、祖父エノクと同様に神の預言者で、少なくとも自分の息子ノアについての預言をしていました。洪水前の族長たちのうちで実際に預言した部分が聖書に記録されているのは、レメクとエノクの二人だけです。また面白いことには、洪水前の族長たちのうちで、彼らが死んでからも父親が生きていたのも、この二人だけです。エノクはエレデが死ぬ四百三十五年前に天に移され、メトシエラはレメクが死んでから五年、生きていました。

また、何らかの理由で、エノクとレメクの名前だけが、不敬虔なカインの子孫である彼らの遠い親戚に当たるある人に、すでにつけられた名でした。おそらく、カインの子孫のエノクとレメクは、二人とも、セツの子孫のエノクとレメクが生まれた時に生きていたでしょう。どうして後者は、あえて前者の名にちなんで名をつけられたのでしょうか。可能性のあることは、おそらく、家族愛による行為であって、セツ系の二人の

信仰のあかして彼らを神に連れ戻したいという希望のゆえであったことでしょう。あるいは、その名は当時の人々の間ではありふれていたのかも知れません。

洪水前の人々は、休息を意味する名前のつけられたノアと、彼の三人の息子たちセム、ハム、ヤペテの時に全盛を極めました。ノアが生まれた時、父レメクは、のろいが取り除かれる来るべき時について預言しました。そのことは、創造と墮落の記憶はアダムから彼らに伝えられた記録を受け取って信じた人たちの心に、少なくともなお、新鮮であったことを示しています。このことは、五章の系図に、大きな「ギャップ」があり得ないことを示す強力な証拠です。この記録と、人類の起源を数百万年前とする進化論に立つどの推測とも調和させることはできません。

アダム、アベル、エノクと共に、レメクは、確かに「神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時」(使三・二一)とペテロが言った時に、ペテロの心の中にあつた預言者たちの一人でした。のろわれた大地が、洪水の水できれいにされている時に、箱船によって生命が保たれた一人としてノアは、もちろん、レメクの預言の成就の唯一の前触れでした。約束のすえは、なお将来のことでしたが、イエス・キリストの来臨の時に成就されるので、約束された、イエス・キリストの来臨は、真の「休息」であり、「慰め」になるはずです。

他の族長たちすべてと同じようにレメクは、ノアの他に「息子、娘たちを生み」ました。これらノアの兄弟姉妹たちは洪水で滅ぼされたに違いがないと思われまます。

さらに、セツ系の多くの人たちも、滅ぼされたに違いありません。なぜなら、カインの家系だけが「地にふえ」(創六・一) 広がることはありえなかつたからです。こうして、自由奔放になつた邪悪で腐敗した者た

ちは、エノクからノアに至る直系で、おそらく神を敬う残されたわずかの人を除いて、この時までにはカインとセツの両方の家系に悪い影響を及ぼしてしまったことでしょう。

確かめることはできませんが、おそらく、ノアの家族さえその影響を受けたことでしょう。大洪水で生き残ったのは、彼の三人の息子たちだけだと聖書は述べています。しかし、ノアもまた、他の族長たちと同じように「息子、娘たちを生んだ」と思われます。なぜなら、セム、ハム、ヤペテが生まれた時、ノアは五百歳になっており、その年齢は、他に明記されている族長たちに子どもが生まれた年齢に比べて、三百歳以上も年が上だからです。次の預言者の系図に当たる部分にセムだけではなく、三人の息子たちの名前が挙げられている理由は、これら三人がノアの家族の中でノアと共に箱船に入るよう選ばれ、それゆえ、洪水後の民族の祖先となった人々だったからです。

もちろん、セム、ハム、ヤペテが三つ子であったと考える必要はありませんが、彼らのうちのどれかが生まれた時、ノアはすでに五百歳になっていたということです。五百年の期間と洪水までの百年間は、神を敬うノアにとって、痛みと嘆きの時であったに違いありません。世界は、急速に、想像も出来ないほど邪悪になり、暴虐に満ちてきて、明らかに、ノアの忠実な伝道やあかしも無駄に思われました。自分の子どもたちのいく人かが、この悪の泥沼にのみ込まれるのをノアが見たかどうかは分かりませんが、邪悪と暴虐が兄弟姉妹たちや愛する者たちの心をくじかせたのを見たことに疑いはないでしょう。彼はエノクと同じように、神と共に歩み、全世界が悪に屈服してしまう前に神が介入してくださるよう、しばしば切望し、祈ったに違いありません。